

第3回日本館基本構想ワークショップ議事録

■日 時：2020年10月20日(火) 10:00~12:00

■参加者（五十音順）：

市原 えつこ氏（メディアアーティスト）、指出 一正氏（株式会社 sotokoto online 代表取締役/ソトコト編集長）、佐藤 オオキ氏（デザインオフィス nendo 代表/デザイナー）、塩瀬 隆之氏（京都大学総合博物館 准教授）、太刀川 英輔氏（NOSIGNER 代表/デザインストラテジスト/慶應義塾大学特別招聘准教授）、田中 みゆき氏（キュレーター/プロデューサー/東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員）、平賀 達也氏（ランドスケープアーキテクト/株式会社ランドスケープ・プラス 代表取締役）、平田 晃久氏（建築家/京都大学教授/平田晃久建築設計事務所）、南澤 孝太氏（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 教授）

■議事概要：

冒頭に経産省より「地域材の活用を通じたSDGsの推進について（資料作成：内閣官房、林野庁、国土交通省、環境省）」を説明。その後、コロナ禍を経て変わったと思うこと、私たちは5年後をどう迎えると思うか等について、各参加者からの主な意見は以下の通り。

- コロナ禍を経てデジタルへのマインドシフトが進んでいる。この動きは止まらないので、その前提で考えるべき。大阪・関西万博がデジタルシフトして初めての万博になるなら、今から準備をしなければいけないことがたくさんある。
- オンライン会議の普及で、距離の概念が無くなり、距離を超えて集うコストが下がったと感じている。ポストコロナにおいて、このメリットをいかに伸ばせるかが大事。
- 密が前提の楽しみが悪という風潮だが、長い人生を生きるうえで祝祭性は絶対に必要だと思う。物理的に密にできない中で、どうやって祝祭性を醸成していけばよいのか気になっている。
- SDGsの話では、貧困など人に関する課題は解決すると思うが、海や森などの自然に関する課題は達成できないのではないかと予測している。
- これまでの議論の中で、日本館に取り入れるべき要素として「創造性教育」「共に生きる」「コラボレーションする」というようなコミュニケーションに関する要素が出てきたと思う。また、日本館が国際的な協調や議論のハブになるべきという話もあった。
- 「空間、時間、身体を超える共体験」という要素は日本館に入れてもよいと思う。
- 多様な個性が組み合わさることで何か新しい価値が生み出されるという要素を日本館に入れておくべき。
- 「いのち」の捉え方が漠然としていると思う。より明文化する必要があるのではないか。

- 愛知万博では、「自然の叡智」というテーマがあり、「愛・地球博」という愛称があった。愛知万博の考え方とこれまでのワーキンググループでの議論は近いものがあると思うが、違いとしては、今は自然とどう共生しないといけないかが問われているということだと思う。
- 一つの世界の中に色々なものがいて、それぞれ見ている世界は違うけれどもそれらが絡まって一体になっている感じが出るとよいと思う。

(以上)